

快適都市住居

——ベルリンから大阪を考える——

狩野忠正

主旨

空間に魅力がなければ建築とはいえない。都市に夢のある住居がなければ都市とはいえないのともいえるのである。大阪の都心、船場は100年前、魅力的な住居が軒を連ねていた。(図-1) ベルリンの100年前から建っている住居を見ると、同じことが理解できるのである。大阪の都市住居は時が経過するにつれて、何故面白くなくなったのか、豊かさがなくなったのだろうか、そして、魅力を再び都市に取り戻すには、いかなる方法を必要とするのか、今回のレポートの目的はそこにある。現代にあっても、都市を魅力的にすることは可能だということを伝えたい。そのためには、現実にあったコスト、技術を使って可能だということを明らかにする必要がある。結論としては、都市の魅力を取り戻すのは、「人々の心構え」次第だということが浮

かび上がってくる。それは個々の建築に関する「思い入れ」にあるといえる。

□ 橋の役目

以前、都市は遊園地のように面白かった。時を忘れて人々は行動した。動物も樹木も建築物も生活の一部であったのだ。大阪の江戸時代の四ツ橋の絵を見ると、都市にある四ツ橋(図-2)は夢の掛け橋の如くである。川のある町、大阪の象徴は橋にあった。橋は手前の地と対岸の地との個性を認め合う装置空間の役割を持ち、橋の上ではどちらにも属さない中間空間ともいえる。大阪の人々は、橋を渡ることによって異次元体験へと向かったのである。気分の更新装置とでもいえるのである。ベルリンにあっても同じことがいえる。都市はほとんど水平地盤であり、街中は穏やかな水流



図-1 大正時代の船場

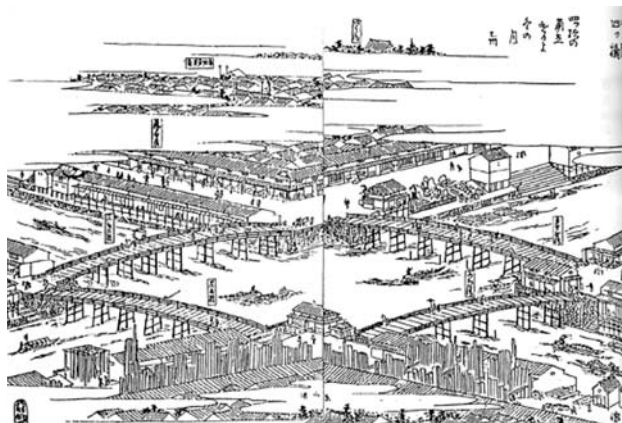


図-2 江戸時代の四ツ橋

をたたえている。そこに掛ける橋は大切な意味を持ってきた。写真のシュプレー川の橋は、1998年完成のスペインの建築家カラトラバの設計による橋である。(図-3) 兩岸の場所の性格の違いを持ちながらも、橋は都市の魅力的要素になっている。

□ 緑は生命体

次に都市の緑に話をすすめたい。大阪は街路が公園であった。道のそばに植えられた柳・イチョウ。(図-4) 江戸時代の地図を見る大阪城を中心に街路がのびている。ベルリンは中央に大公園となるティアーガルテン、動物園を配置し、幅広の道路がのびている。緑あふれるのは樹木あふれる公園とプラタナスの街路である。ここで見るベルリンは100年前と同じ緑をたたえているが、大阪は計画的に緑を取り入れ幹線道路とした御堂筋を除いて、街中から緑がなくなってしまっている。緑がなくなると、生物の住むところもなくなってしまい、しいては人間生活も潤いのないものになってしまうのである。



図-3 シュプレー川の橋

□ 船場の人口減少

都市住居はどうだろうか。100年前の大阪を考えると、都市に多くの人が住んでいた。船場地区をとってみても、1960年には30000人も住んでいたが、2002年には4000人とあるように(図-5)、ただ職住分離の現象の結果だといって済まされない。そこには問題が潜んでいると私は考える。ベルリンを例にとると、第2次大戦前後の人口減少はあるにしても、ほぼ同数の人々が都心に住んでいる。ここでは都心に住みたいという要素が多く秘めているからだ。美術館・音楽ホール・フォーラム会場・公園・マーケット・カフェと住居を支えるものが十分備わっていたのだ。ところが現代の大阪は、住むために必要な附属施設をもぎとってしまっている。これでは都心回帰は難しくなる。

□ 豊かな都市住居

次に建築デザインに目をやると、100年前の大阪の街並みは豊かだ。人を招き入れる要素をたたえているのではないか。深い庇、大胆にして繊細な窓廻り、個性的な佇まいと、ここに住みたい、そのために面白い建築



図-4 明治時代の京橋

にしたいという思いが働いている。ここでは、いつまでも住みたいのだ。何年で資本を回収しようという意味はあまり働いていない。ベルリンの街は、100年以上経過した建物が多く残されている。第2次大戦で爆撃されて、屋根が落とされてもまた元の姿にもどしている。歴史的建物に人々は好んで住もうとする。住居に対する安堵感とでもいえるものがある。そこで、多くの人々は犬と同居しているのである。

ベルリンで印象に残った言葉がある。何を創るにも始めに語ることは「子供達のために、今私達にできることは何か」となる。この言葉の意味は深く、力強い。これからも語り継がれることは確かだ。未来に対する期待であり、この言葉を継続していかなければという指命感が作用する。都市住居は子供のために有効に働くことを目指し、豊かになっていくのだ。そこには遊び心が大きく作用している。子供は都市に遊び、住居は遊具の一部となる。この遊戯感覚こそ、都市に求められるのである。現代の大阪の都心は、子供が遊べる空間など無きに等しい。戦後は顕著となる。遊々空間を都心に設けると、刺激的な生活が見えてくることは間違いない。そこには自然があり、動物と共に住み、思う存分行動できる子供の空間が現れてくる。

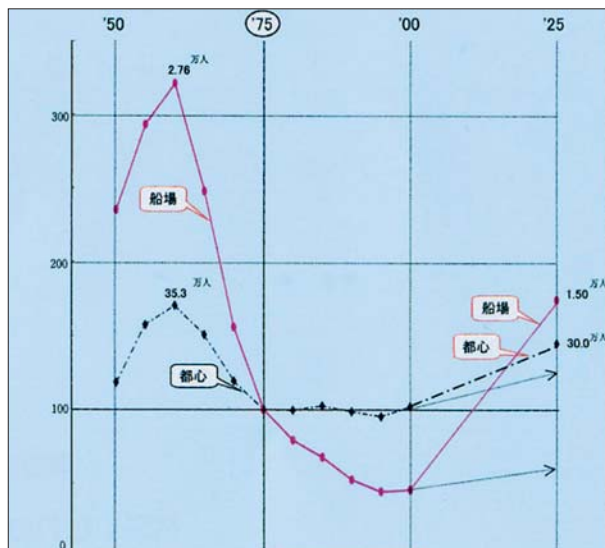


図-5 大阪・人口の推移

再び昭和10年の大阪の都心地図を見ることにする。御堂筋に接してすでにガスビルがあり、ビルの前には劇場小屋があり、食堂があり、住居があり、そして小学校がある。ここでは子供が思い思いに日常生活を謳歌していたのだ。現在はどうか。都心は車の通行で支配され、オフィスビルが軒を並べ、小学校は統廃合され、子供の姿はなくなってしまった。人の歩行は遠慮がちとなり、車が支配する都市となっている。そこからは文化の成立など望めるものではない。ベルリンには都心に子供の遊び場があり、犬を連れて散歩できる場が至る所にある。空間に対する感覚が大阪とはかなり違っている。

□ 建築に遊び心を

建築のデザインに目を向けると、100年前の大阪の街は伝統的な屋根を連ねる木造家屋群であり、ヒューマンな場所を感じるのである。人々は建築と一体となり、建築に遊び、楽しみの要素と捉えられていた。そこで会合し、祭りごと自然体であった。自然体は面白い都市を成立させる要素がある。都市は人間と他との共生があって成立する。共生は無意識のうちに行われ



図-6 江戸時代の天神祭

る。建築する行為は子供達のためとなり、遊び心があり、面白いことが前提になる。

再び都市に遊ぶとはどういうことだろうか。遊びには秩序を求め、安心感がなければ都市に遊ぶとはいえない。例え、歴史的に悲惨な事件があったとしても、開示されなければ都市の時間軸はぐらついてしまうのである。大阪の都市の歴史が、多くの点で封印されている。そのことが、逆に安心感をそいでしまっている。過去の喜びと悲しみが理解されることによって、都市は本来の「思い入れ」を取り戻すのである。(図-6,7,8)

□ 船場のエコツーリズム

最近、都市再生としてエコツーリズム手法が取り入れられようとしている。この考え方の背景は、人々の手によって都市の魅力を呼び起こそうとするものである。この行為は、外部から多くの人々が訪れ、都市に遊ぶことをすすめるためなのである。その為には街を

わかりやすく解説する必要がある。大阪、船場にあってもいろいろなことが可能だ。歴史建造物の再生利用、建築外観の再生、遊び場、中庭、そこらには樹木があり、遊具があり、そして重要なことは大地を取り戻すことになる。そのためには、面白い風景を取り戻そうとする「思い入れ」が重要となる。

□ 都市の森

建築が高層になるにつれて、高い樹木が植えられなければ、バランスを欠くものになってしまう。都市の未来は、屋上庭園、街路樹、バルコニーでの植栽となるが、これだけでは不十分である。都市には車の通行から分離された中庭（一部囲われた庭）が必要なのだ。法的な手法による公開空地方式では、都市の森はとらえにくいのである。人間行動形態にそった庭があって、都市の森となる。

学生達と船場のデザインサーベイを行ったとき、一番印象に残ったのはどこかという問いに対して返って



図-7 ベルリン 150年前の住居



図-8 ベルリン 第二次世界大戦の傷跡を残す

きた学生の答えが、なんと道修町の守護神・神農さんの中庭であった。この小さな社に植えられた巨大な楠の木が都市の性格を語っている。

□ 実験劇場

劇場の成立条件をただしてみることにする。一人の人物が通り過ぎる。それを一人の人物が見ている。そこに劇場が成立する。実験劇場は、大掛かりな装置は必要としない。その場にしかないシーンを求めるのである。都市住居が劇場となるときは、老人が若者を見たり、若者が子供、老人を見ることにある。劇場となるための背景は十分といえるだろうか。そのためには背景となる場がなければ演技も生きてこない。このような条件が備わったとき、街は映画の舞台ともなる。そして映像は世界へと伝達される。

劇場としての大阪は、進取の気質にあふれていた。古くは適塾にあるように、外来文化を取り入れ、刺激を求め、発展してきたのだ。そこには実験ともいえる

大胆な構想力があふれていた。そのことが、繊維産業を進行させ、薬産業を定着させる街となったのである。産業の充実は、都市に住む人々の活力源となった。そのもとをただせば、実験的で活力ある市民意識が作用していたといえよう。

大阪の都市住居を整備する端緒をどこに求めればよいだろうか。都市を観察するところから始めたい。観察の結果、街の空地にアートを展示すればよい。現代は点と点の刺激が重要である。刺激は街を見なおし、街を活気づける。その例は、ドイツの各都市で行われている、ビエンナーレ、トリエンナーレがふさわしい。(図-9,10) 都市の見直しがあって再生されていくのだ。大阪に世界のアーティストが集まり、フォーラムが行われ、その時代にふさわしいメッセージが発せられる。このようにして、都市は再生され、快適都市住居が成立する。



図-9 カッセル ドキュメンタ



図-10 ミュンスター 彫刻展

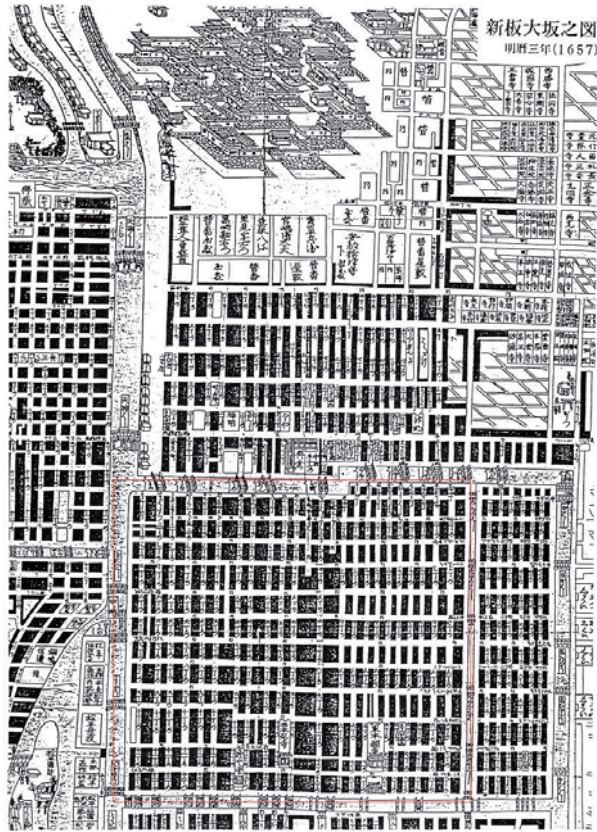


図4-43 明暦三年大坂全国一「大坂建設史概説」より

多くの橋がある江戸時代の大阪



大阪は生活の場であると同時に、
名所となる場所が数多くあった。

明治時代の大阪